

Gymnocalycium paediophilum Schütz ex F.Ritter

Gymnocalycium paediophilum は一私の意見ですが—今まで、Cerro Leon の小さな丘の頂上でのみ見つかっている、印象的で、特色のある種である。その種は、少なくとも 220m の高度のこの山の上のみで生えていて、決して平原では生えていない。この原産地は、遺跡の場所である。この植物は *G.chiquitanum*(花と種子)にそして *G.chacoense*(種子)に密接に関連している、しかし完全に孤立した場所により異なる進化を辿った。

学術描写

胴体は、底面部から良く、側芽を出す、古くなっても、短い胴体。直径で 120mm まで、長さ



まで 200mm まで。表皮は鈍い、明るい緑色から暗緑色まで。大抵 7 稜、稀に 10 稜まで。稜は丸みがあり、幾分突き出している。古い個体では、突き出しは顕著になり、高さ 26mm までになる。古い個体は、刺座の上に、斜めの膨らみを持つ。

縁刺は 5 本から 9 本、針のように尖っている。下部の一本は、しばしば、より長く、長さ 30mm までになる。新しく出た刺は赤っぽい茶色。後に茶色っぽい先端を伴う、灰色。4 本までの中刺は茶色っぽい先端を持つ灰色。稀に完全に灰色。長さは 40mm まで。中刺 (central spines) の上には 4 本までの、より小さい、より短い、より細い中刺(central thorns)。刺の表面は粗い。

果実はピンク色っぽい、鱗片を伴う、青—緑色の配色、汁気が多い、卵形から球形



写真 1(上): どこでも、見つかる *G.paediophilum*

写真 2(中): *Cleistocactus baumannii*, *Opuntia spec.* と一緒に *G.paediophilum*

写真 3(下): *G.paediophilum* は最大 200mm の高さまで大きくなります。



G.paediophilum VoS22

Cerro Leon, Alto Paraguay, Paraguay

写真は、いずれも Volker Schädlich 氏

の外観をしている。果肉は白色。成熟すると、果実は縦方向に裂ける。果実は長さ 5mm から 15mm、幅 5mm から 15mm。

写真 4(上):この山だけで見つけることができる別の *Gymnocalycium* は、F.Ritter 氏によって記述された *G.stenopleurum* です。

写真 5(下):*G.paediophilum* VoS22

Cerro Leon, Alto Paraguay, Paraguay

写真は、いずれも Volker Schädlich 氏



種子

種子は長さ 0.7mm から 1mm、幅は 0.8mm まで。種皮は暗い赤茶色から黒色、鈍い輝きがあり、細かい突起もある。ハイラムの領域は卵形、白っぽい、境界には小さな縁飾り。

種子グループ：亜属 *Microsemineum* *Schütz*

写真 6(上)：種子は、種子グループ *Microsemineum* *Schütz* に属します。

写真 7(中)：きめ細かく盛り上がった種皮が、はっきり見えます。

写真 8(下)：*G.paediophilum* VoS22 の果実。

写真は、いずれも Volker Schädlich 氏

花

花は、長さで 80mm まで、蕾の間は、花はクリーム色から黄色っぽい、開花している間は、花は白色から淡いピンク色。色調は場所や花の年齢に大きく依存して変わる。花柱はピンク色で、Ritter 氏により、最初の学術描写で述べられているような“白っぽい”ではない。

花糸もまた、ピンク色で、花の底全体にわたり、広がっている。最も下の花糸は花柱と反対方向に横たわり、上部に位置する花糸は夫々の先端部で密生し、花柱より高くなる。



写真 9 : G.paediophilum VoS22 の花断面図、
ピンク色の花柱がはっきり見えます。

写真は Volker Schädlich 氏

“Kaktusy” に最初の学術記載を発表した。

その過程で、最初の学術記載の中で、誤記が生じた。: paediophilum (paidion – child, philos – friend) が paediophylum となってしまった。Schütz 氏は 1986 年彼の本“Monographer rodu *Gymnocalycium*”の中で、その名前を訂正した。意味は明白になったけれども、新たな混乱の原因が持ち込まれた。Schütz 氏による、*G.paediophylum* はリッター氏の FR 1179 に基づいていた、従って、元の名前は (Basionym) は FR 1179 となる。このフィールド番号は別の誤解を意味する。リッター氏のフィールド番号 1179 は実際には *G.damsii*(Ritter 氏、1979 年) であるので、*G.paediophilum* に対するリッター氏のフィールド番号、1177 は Schütz 氏によって、*G.stenopleurum* に対するフィールド番号であると主張された。

訂正の間に、Schütz 氏はその名前を変更した、しかし残りの問題を見過ごしていた。基本的に、これは、二つの同じ分類学種の公表を意味する事になる。: 元の名前 FR 1177 を持つ、*G.paediophilum Ritter* と元の名前 FR 1179 を持つ、*G.paediophylum Schütz*。後者はまた、“nomen invalid(無効な学名)”でもある。何故なら、伝えられている、Pilzen(ピルツェン)の植物標本館 SCK (Carolinae 大学医学部) に寄託された正基準標本 (Holotypus) は其処には存在しないから。

Friedrich Ritter 氏は 1979 年に、その特色のある、種の彼の学術記載を “Kakteen in Südamerika(南アメリカのカクタス、1 巻、269 ページ)” の中に発表した。Ritter 氏は植物館用標本を Utrecht(ユトレヒト)に寄託した (彼のフィールド番号 FR 1177 は無かったけれども) ので、彼の学術記載は、命名法の規則に従うと、有効である。今日まで、自然界で、*G.paediophilum* を観察できた人は一握りしか存在しない。カクタス

文献中で、この種を取り扱う間に、学名の綴りと最初の発見物のフィールド番号に関して無数

歴史

Friedrich Ritter (フリードリッヒ・リッター) 氏はこの種を 1963 年の 9 月に発見した。Ritter 氏が採取した、少しの種子と個体が、ドイツの Frankfurt/Main(メイン州のフランクフルト)の彼の姉 Hildegard Winter (ヒルデガルド・ウインター) 氏に着いた。種子はウインター夫人により、採取番号 FR 1177 の下に市場に出された。Bohmil Schütz (ボーミル・シュツ) 氏は、1977 年、Ferdinand Plesniak (フェルデナンド・プレスニク) 氏の実生苗に基づいて、チェコの雑誌



写真 10 : Cerro Leon の夕方の情景

写真は Volker Schädlich 氏

の間違いが存在する。D.Hunt 氏のグループは、彼らの、“The New Cactus Lexicon”(2006 年)



の中で、この種を *G.chiquitanum* の下に、入れている (リストアップしている)。

写真 11(上) : 朝は驚きから始まります…
空気が抜けているタイヤ。

写真 12(下) : 人は、ここでは、非常に孤独
であり、すばやくその限界を学びま
す。見るところはどこでも、不可解な
チャコの植物があります。

写真は、いずれも Volker Schädlich 氏



原産地

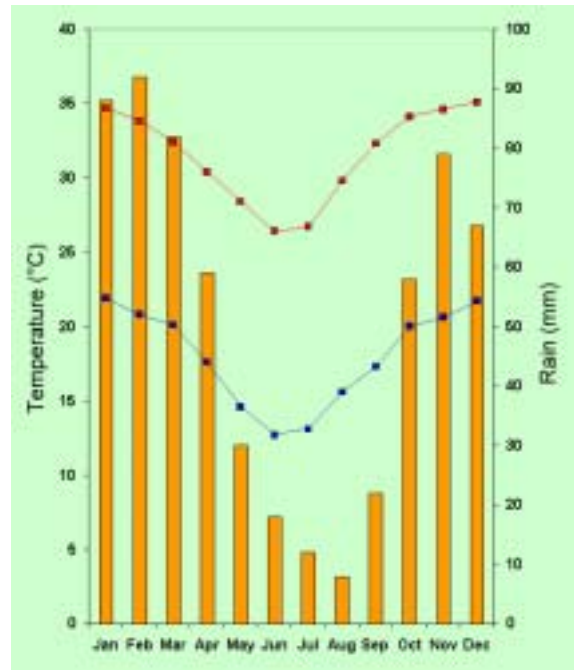
地理的に言うと、Chaco 地方は、アンデス産地の上昇褶曲作用 (upfolding) により形成された、深さ 3000m に達する、海溝 (トラフ) である。数百万年の間に、Chaco-trough(Putzer 著：“Geologie von Paraguay (パラグアイの地理学)”, 1962 年、ベルリン Gebrüder Borneträger 社出版による)は風化作用物質の輸送手段とし



地図 : *G.paediophilum* の生息地 注意 Cerro レオンは 18 世紀イタリアの地図上に既にあらわれました。尾根は、正方形の約 40 平方キロメートルにあり、パラグアイの最も大きい国立公園、「Defensores del Chaco」に属します。

グラフ : 天気の変化は、しばしば温度の激的な下落があります。そして、風は北部から南部に変わります。それは珍しくなく、一年の降水量の 4 分の 1 は数時間の過程で行われます。

(いずれもマリオ Wick 博士の好意による)



て作用する水によって、アンデス山地からの堆積物により満たされた。チャコトラフへの堆積の長期にわたり、強い断層 (shift) が発生した。断層の間に、岩が地表に押し

上げられた一構造地質学（テクトニック）的隆起（upheavals）（Seibert 著：“Farbatlas Sudamerika（南アメリカのカラー地図）”シュッツガルトの E.Ulmer 社の 1996 年の出版）が出現した。それらの中で、Cerro Leon は、およそ 40km 平方の広がりを持った、形成された山である。最高高度は約 600m、岩石ファンなら、珪岩と砂岩からなる、山のふもとの堆積物の美しい層を賛美するだろう。

栽培の注意点

この種は、平均最低気温、約 19 度 C で、年間平均降雨量 430mm の地域から、来ている。夜間の霜は、絶対に禁物である。私に関して言えば、冬季は気温 10 度 C 前後と完全に乾燥した、基礎土壌と組み合わせ、試しながら調べている。低温は短い期間であれば、耐える事が出来る、しかし、よく根の損失へと導く。

成長期には、植物は多くの水を取り込む、半日陰の場所を好む。もし植物が急速に成長しているなら、良く日の当たる場所は植物を傷めない—その時には植物は非常に長い刺を発達させる。

増殖は古い個体に関しては、問題は無い、何故なら、たくさんの側芽を出すから。良く、発芽する種子から育てることは問題が無い。



写真 13(上) : *G.paediophilum* VoS22

写真 14(下) : 完全に開花した白い花の *G.paediophilum* VoS22 写真は Volker Schädlich 氏

※ Volker Schädlich 氏のホームページ "Die Gattung *Gymnocalycium*" <http://www.gymnos.de/> の中の *Gymnos from A to Z* からの翻訳で、Volker Schädlich 氏の好意により、翻訳の掲載許可を頂いています。無断転載を禁止します。